

武蔵野日曜聖書講筵

キリスト出現の預言

――イザヤ書7、11、28、35、40、42、45、53、55、59、60章、他――

1993年12月12日

小池辰雄

選ばれた者が「遣れる者」 審きは恵みの前段階 隅の首石 天国的な現実 キリストは隠れたる神 十字架の砕け キリスト預言

【イザヤ7】

14 この故に主みずから一の予兆をなんじらに賜うべし。視よおとめ孕みて子をうまん。その名をインマヌエルと称うべし。

【イザヤ11】

1 エツサイの株より一つの芽いで、その根より一つの枝はえて実をむすばん。² その上にエホバの霊とどまらん。これ智慧聡明の霊、謀略才能の霊、知識の霊、エホバをおそるるの霊なり。³ かれはエホバを畏るるをもて^{たのしみ} 歓楽とし、また目みるところによりて^{さばき} 審判をなさず、耳きくところによりて^{さだめ} 断定をなさず、⁴ 正義をもて貧しき者をさばき、その口唇の氣息をもて^{あしきもの} 悪人をころすべし。

【イザヤ28】

16 このゆえに神エホバかくいい給う、視よわれシオンに一つの石をすえてその^{もと} 基となせり。これは^{てしころ} 試みをへたる石とうとき隅石かたくすえたる石なり。これに^{よりたの} 依頼むものはあわつることなし。

【イザヤ35】

5 そのとき^{めしい} 聾者の目はひらけ、^{あしなえ} 跛者は鹿の如くにとびはしり、^{みみしい} 聾者の耳はあくことを得べし。^{おうし} 6 そのときいで、沙漠に川ながるべければなり。^{すな} 7 やけたる沙は池となり、うるおいなき地はみずの源となり、^{みなもと} 野犬のふしたるすみかは^{あしよし} 蘆葦のしげりあう所となるべし。^{おおじ} 8 かしこに大路あり。そのみちは^{きよきみち} 聖道となえられん。穢れたるものはこれを過ぐることあたわず。ただ主の民のために備えらる。これを歩むものはおろかなりとも迷うことなし。^{みち} 9 かしこに獅おらず、あらしき獣もその路にのぼることなし。然ばそこにて之にあう事なかるべし。ただ贖われたる者のみそこを歩まん。¹⁰ エホバに贖いすくわれし者うたうたいつつ帰りてシ



オンにきたり、その首にとこしえの歡喜をいただき、楽しみとよろこびとをえん。而して悲哀となげきとは逃げさるべし。

【イザヤ40】

10 みよ主エホバ能力をもちて来りたまわん。その臂は統治めたまわん。賞賜はその手にあり。はたらきの値はその前にあり。11 主は牧者のごとくその群をやしない、その臂にて小羊をいただき、之をその懷中にいれてたずさえ、乳をふくまする者をやわからかに導きたまわん。

【イザヤ42】

1 わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人をみよ、我わが靈をかれにあたえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。2 かれは叫ぶことなく声をあぐることなくその声を街頭にきこえしめず。3 また傷める蘆をおることなくほのくらき燈火をけすことなく、真理をもて道をしめさん。4 かれは衰えず喪膽せずして道を地にたておわらん。もろもろの島はその法言をまちのぞむべし。

5 天をつくりてこれをのべ、地とそのうえの産物とをひらき、そのうえの民に息をあたえ、その中をあゆむものに靈をあたえたもう神エホバかく言い給う。6 云く、われエホバ公義をもてなんじを召したり。われなんじの手をとり汝をまもり、なんじを民の契約とし異邦人のひかりとなし、7 而して瞽の目を開き俘囚を獄よりいだし、暗きにすめるものを檻のうちより出さしめん。8 われはエホバなり、是わが名なり。我はわが栄光をほかの者にあたえず、わがほまれを偶像にあたえざるなり。9 さきに預言せるところはや成れり。我また新しきことをつけん。事いまだ兆さざるさきに我まずなんじらに聞かせんと。

【イザヤ45】

15 救いをほどこし給うイスラエルの神よ、まことに汝はかくれています神なり。

【イザヤ53】

1 われらが宣るところを信ぜしものは誰ぞや、エホバの手はたれにあらわれしや。2 かれは主のまえに芽えのごとく、燥きたる土よりいづる樹株のごとくそだちたり。われらが見るべきうるわしき容なく、うつくしき貌はなく、われらがしたうべき艷色なし。3 かれは侮られて人にすてられ、悲哀の人にして病患をしれり。また面をおおいて避ることをせらるる者のごとく侮られたり。われらも彼をとうとまざりき。

4 まことに彼はわれらの病患をおい、我等のかなしみを担えり。然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。5 彼はわれらの



愆^{とが}のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みずから懲罰^{こらしめ}をうけてわれらに平安^{やすき}をあとう。そのうたれし瘡^{きず}によりてわれらは癒^{なを}されたり。⁶ われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまえり。

⁷ 彼はくるしめられるれどもみずから謙^{へりく}だりて口をひらかず、屠場^{ほふりば}にひかるる羔羊^{こひつじ}の如く、毛をきる者のまえにもだす羊の如くしてその口をひらかざりき。⁸ かれは虐待^{しいたげ}と審判^{さばき}によりて取り去られたり。その代^よの人のうち誰か彼が活けるものの地より絶^たれしことを思いたりしや。彼は民の^たがの為にうたれしなり。⁹ その墓はあしき者とともに設けられたれど、死ぬるときは富めるものとともになれり。かれは暴^{あらび}をおこなわず、その口にも虚偽^{いつわり}なかりき。

¹⁰ されどエホバはかれを碎くことをよろこびて之をなやましたまえり。斯てかれの靈魂^{たましひ}とがの献物^{そなえもの}をなすにいたらば彼その末をみるを得その日は永からん。かつエホバの悦び給うことは彼の手によりて栄ゆべし。¹¹ かれは己がたましひの煩勞^{いたずき}をみて心たらわん。わが義^{ただ}しき僕はその知識によりておおくの人を義とし、又かれらの不義をおわん。¹² このゆえに我かれをして大なるものとともに物をわかし取らしめん。かれは強きものとともに掠物^{えもの}をわかしとるべし。彼はおのが靈魂をかたぶけて死にいたらしめ、愆^{とが}あるものとともにに数えられたればなり。彼はおおくの人の罪をおい、愆^{とが}あるものの為にとりなしをなせり。

【イザヤ55】

¹ 噫^{ああ}なんじら渴ける者ことごとく水にきたれ、金なき者もきたるべし。汝等きたりてかい求めてくらえ。きたれ金なく価なくして葡萄酒と乳とをかえ。……⁶ なんじら遇^あうことをうる間にエホバを尋ねよ。近くいたもう間によびもとめよ。⁷ 悪しきものはその途^{みち}をすて、よこしまなる人はその思念^{おもひ}をすてエホバに反^{かえ}れ。さらば憐憫^{あわれみ}をほどこしたまわん。我等の神にかえれ豊かに赦しをあたえ給わん。

【イザヤ59】

²⁰ エホバのたまわく、贖^{あがなうもの}者シオンにきたりヤコブのなかの愆^{とが}をはなるる者につかんと。エホバいい給わく、なんじの上にあるわが霊、なんじの口におきたるわがことばは、今よりのち永遠^{とこしえ}になんじの口よりなんじの裔^{すえ}の口より汝のすえの裔の口よりはなれざるべし。わがかれらにたつる契約はこれなりと。此はエホバのみことばなり。

【イザヤ60】

¹⁹ 昼は日ふたたびなんじの光とならず、月も輝きてなんじを照らさず、エホ



バ永遠になんじの光となり、なんじの神はなんじの栄えとなり給わん。²⁰なんじの日はふたたび落ず、なんじの月はかくなることなかるべし。そはエホバ永遠になんじの光となり、汝のかなしみの日畢るべければなり。

【ミカ5】

²ベテレヘム、エフラタ汝はユダの郡中にて小さき者なり。然れどもイスラエルの君となる者汝の中より我がために出づべし。その出づる事は古昔より永遠の日よりなり。……⁴彼はエホバの力に由りその神エホバの名の威光によりて立ちてその群を牧い之をして安然に居らしめん。今彼はたいなる者となりて地の極にまでおよばん。⁵彼は平和なり。アスリヤ人われらの国に入り我らの宮殿を踏みあらさんとする時は我等七人の牧者八人の人君を立てこれに当たらん。……⁷ヤコブの遺余者は衆多の民の中に在ること人に頼らず世の人を俟ずしてエホバより降る露の如く青草の上にふりしく雨の如くならん。

【エレミヤ23】

⁵エホバいいたまひけるは視よわがダビデに一つの義しき枝を起こす日來らん。彼王となりて世を治め栄え公道と公義を世に行うべし。⁶其の日ユダは救いをえイスラエルは安きに居らん。其の名はエホバ我等の義と称えらるべし。

【マタイ1】

²³視よ、処女みごもりて子を生まん。その名はインマヌエルと称えられん。

【テサロニケ後2】

⁸斯て其のとき不法の者あらわれん、而して主イエス御口の氣息をもて彼を殺し、降臨の輝耀をもて彼を亡し給わん。……¹³されど主に愛せらるる兄弟よ、われら常に汝等のために神に感謝せざるを得ず。神は御霊によれる潔と真理に対する信仰とをもて始めより汝らを救いに選び、¹⁴また我らの主イエス・キリストの栄光を得させんとて、我らの福音をもて汝らを招き給えはなり。¹⁵されば兄弟よ、堅く立ちて我らの言あるいは書に由りて教えられたる伝えを守れ。

¹⁶我らの主イエス・キリスト及び我らを愛し恩恵をもて永遠の慰安と善き望とを与え給う我らの父なる神、¹⁷願くは汝らの心を慰めて、凡ての善き業と言とに堅う為給わんことを。

●選ばれた者が「遺れる者」

この次の日曜日をクリスマスとして迎えるわけですが、その準備の意味で今日は、「キリ



スト出現の預言」ということで、旧約のところのお話を一緒に学びたいと思います。

旧約で一番キリストの預言に係わりがあるのは、何といってもイザヤ書です。けれども、ミカ書に不思議な言葉があります。

「²ベテレヘム、エフラタ汝はユダの郡中にて小さき者なり。然れどもイスラエルの君となる者汝の中より我がために出づべし。その出づる事は古昔より永遠の日よりなり。」(ミカ5・2)

「ベーツ・レヘム」とは「パンの家」という意味。「エフラタ」とは「豊かな実りのある所」という意味です。ベトレヘムはキリストの生まれた所です。だから、これはキリストの降誕の預言の言葉なんです。

「ベテレヘムはいと小さき者だが、けれどもイスラエルの君となる者が現れる」

という。どうしてこういう不思議なことが示されるかと思う。そして、

「それは永遠の日から決まっていることなんだ」

と。ミカという預言者はイザヤと大体同じ時代――紀元前9世紀の終り頃――に出てきた預言者です。聖書というのは本当に不思議な、やはり啓示の書ですね、創世記から黙示録にいたるまで。驚嘆します。よく、

「聖書の思想は……」

なんて言う人があるけれども、聖書は絶対に思想ではない。これは全く啓示です。天啓です。不思議な「イスラエルの君となるもの」、霊的な王者が現れるという。

「⁴彼はエホバの力に由りその神エホバの名の威光によりて立ちてその群を牧い^{やすら}之をして安然に居らしめん。今彼は大きいなる者となりて地の極にまでおよばん。」

正にキリストの預言としてふさわしい言葉です。「その群を牧い」とは、イスラエルの子らを導くわけです。牧者が羊を養うように魂をやしなう。地の極まで世の末まで、全世界に及ぶ。イエスは宇宙的な存在ですから。

⁵彼は平和なり。アッスリヤ人われらの国に入り我らの宮殿を踏みあらさんとする時は我等七人の牧者八人の人君を立てこれに当たらん。

「平和」ではなく、「平安」です。平和ではダメです。

「彼は平安なり」

です。「七、八人」というのは使徒たち、キリストの直弟子のことを暗に預言されたような言葉です。

⁷ヤコブの遺余者は衆多の民の中に在ること人に頼らず世の人を俟ずしてエホバより降る露の如く青草の上にふりしく雨の如くならん。」(ミカ5・4-7)

非常に文学的な表現です。「遺れる者」というのはどこまでも残る者という意味で、消えない存在です。我々もみな遺れる者なので、決して消えない存在です。むしろ「遺る者」で



いい。

これがミカ書に出てくるキリスト預言の不思議なところだ。「選ばれたる者」が「遺れる者」という言葉なんです。選びの中の究極の焦点、それがキリストなんです。神に特に選ばれた人ですから。

我々クリスチャンというのはみな「選ばれたる者」なんです。ということは、その人が価値があるから選ばれるのではない。その人の生まれつきのどうのこうの問題ではない。選びというのは神さまの方からの絶対恩寵で取りいだされる。学問があろうがなからうが、そんなことに関係ない。キリストの直弟子たちはみな、そういった選びの器です。農夫だとか漁夫だとか。パウロだけはなかなか学のある男でしたけれども、あとはみなそうではない。ペテロなんてのも、

「無学の凡人」ただひと

と書いてある。選びの器は存在そのものが神の言葉なんです。

これがミカ書のキリスト預言のところだ。

「群れをやしなつて、平安を与えて、大いなる者となる。地の極にまで世の末にまで及ぶ」

という。地の極は空間的、世の末は時間的。時間と空間は相即する。時間の無い空間はなく、空間のない時間もない。時間と空間は離すことができない関係になつてゐる。我々がこうやつて存在しているのも、空間の中に時間的に存在している。時間・空間の、もうひとつ次元が高くなるというと、時間空間を超越してしまう。時間空間に支配されない。それが本当の永遠です。我々はキリストの生命をいただいていると、時間空間を支配する。今現在というものが永遠的性格をもつ。

●審きは恵みの前段階

今度はイザヤ書の11章を見ましょう。これも非常に大事なところだ。

「エッサイの株より一つの芽いで、その根より一つの枝はえて実をむすばん。」

(イザヤ11・1)

不思議な言葉です。「エッサイ」というのはダビデのお父さんのこと。「枝」というのはむしろ原文的にいうと芽生えです。似たような言葉がエレミヤにある。

「⁵エホバいたまいけるは視よわがダビデに一つの義^{ただ}しき枝を起こす日來らん。彼王となりて世を治め栄え公道と公義を世に行うべし。^{おおよけ ただしき}」

「一つの芽生えが出てきて、これが王となる」

という。これが正にこのイザヤ11・1と照応する言葉です。

⁶其の日ユダは救いをえイスラエルは安きに居らん。其の名はエホバ我等の義と称えらるべし。」(エレミヤ23・5・6)



キリストは正に義人ですから、

「義人なし一人だになし。キリストだけが義である」

とパウロが言っているとおりの。キリストはまず自分の民、イスラエルの民の救いに出てきた。そして、これが異邦に及んでいくのはパウロによる。なにしろ、イスラエル人を救わなければしょうがない。

ところが、そのイスラエルがキリストにとうとう背いて十字架に架けてしまった。しょうがないんだ。ユダヤ人はキリストに躓いてしまうわけです。ユダヤ教で旧約から出られない。旧約にこういう預言がいくらかもある。ユダヤ人はそういう頑なな、預言のよめない読み方をしているわけです。今でもなかなかキリストを受けとらない。

「エッサイの株より一つの芽いで、その根より一つの枝はえて実をむすばん。

2その上にエホバの霊とどまらん。これ智慧聡明の霊、謀略才能の霊、知識の霊、エホバをおそるるの霊なり。

全く不思議な言葉です。これはキリストのことなんだ。キリストの素晴らしさというものを畳みかけて書いてある。「謀略」とは妙な訳語ですけども、本当の思慮分別のあることです。「才能」は頭の能力。「知識」はいわゆる「ソフィア」「上智」です。神さまを畏敬するところの霊です。「畏るる」とは「こわがる」ということではない。敬い畏むこと。

3かれはエホバを畏るるをもて歡樂とし、また目みるところによりて審判をなさず、耳きくところによりて断定をなさず、

「歡樂」と書いてある。福音の世界は必ず喜びが伴っている。畏まっていけない。大いに歌って、しまいに踊ります。

4正義をもて貧しき者をさばき、その口唇の氣息をもて悪人をころすべし。」

(イザヤ11・1〜4)

「正義」はむしろ「義」です。「義で審く」ということは必ずその後には憐れみがある。審ききつてしまうのはダメなんです。審きは恵みの前段階なんです。悪い奴は裁いて地獄に落としてしまうけれども、誤解されている人、迫害されている人のために審くというのは、正にの為に審くのであって、それを救い上げることです。これは霊的な力だね。

●隅の首石

この預言を受けたような言葉が新約聖書にある。

「8斯て其のとき不法の者あらわれん、而して主イエス御口の氣息をもて彼を殺し、降臨の輝耀をもて彼を亡し給わん。」(テサロニケ後2:8)

靈気でもって殺されてしまう。

「13されど主に愛せらるる兄弟よ、われら常に汝等のために神に感謝せざるを得ず。神は御霊によれる潔と真理に対する信仰とをもて始めより汝らを救い



に選び、¹⁴また我らの主イエス・キリストの栄光を得させんとて、我らの福音をもて汝らを招き給えばなり。¹⁵されば兄弟よ、堅く立ちて我らの言あるいは書に由りて教えられたる伝えを守れ。

¹⁶我らの主イエス・キリスト及び我らを愛し恩恵をもて永遠の慰安と善き望みとを与え給う我らの父なる神、¹⁷願くは汝らの心を慰めて、凡ての善き業と言とに堅う為給わんことを。」(テサロニケ後2・13〜17)

懇ろに書いてあるね。「永遠の慰安と善き望み」とは珍しい言葉です。

「¹⁶このゆえに神エホバかくいい給う、視よわれシオンに一つの石をすえてその基となせり。これは試みをへたる石とうとき隅石かたくすえたる石なり。これに依頼むものはあわつることなし。」(イザヤ28・16)

人に棄てられたところの石——キリスト——は、ところが実は、神さまの選びの石なんです。「隅の首石」という言葉があるでしょ。ペテロ書にでている。人に棄てられた石が神に拾われて、そして隅の首石となる。

「家造りの棄てたる石は隅の首石となれり」

という。これは詩篇の言葉ですけれども。讚美歌に「千歳の岩よ」という言葉がある。

「千歳の岩」「隅の首石」

とはみなキリストのことです。預言者たちや使徒たちがその石の土台の上に福音の家を建てて、その中に救われていく人が入れられていく。そういう譬えを言っている。そして、

「これに依頼むものはあわつることなし」

と書いてある。

●天国的な現実

イザヤ書35章5〜10節は全くキリスト預言です。

「そのとき瞽者の目はひらけ、聾者の耳はあくことを得べし。

キリストはそれをやったでしょ。盲人の目を開いたり、聾の耳を開いた。キリストが福音書で実際になさったのは、この預言がキリストで成就しているんだ。

⁶そのとき跛者は鹿の如くにとびはしり、聾者の舌はうたうたわん。そは荒野に水わきいで、沙漠に川ながるべければなり。⁷やけたる沙は池となり、うるおいなき地はみずの源となり、野犬のふしたるすみかは蘆葦のしげりあう所となるべし。⁸かしこに大路あり。そのみちは聖道となえられん。穢れたるものはこれを過ぐることもあたわず。ただ主の民のために備えらる。これを歩むものはおろかなりとも迷うことなし。⁹かしこに獅おらず、あらしき獣もその路にのぼることなし。然ばそこにて之にあう事なかるべし。ただ贖われたる者のみそこを歩まん。¹⁰エホバに贖いすくわれし者うたうたいつ



つ歸りてシオンにきたり、その首にとこしえの歡喜をいただき、樂しみとよろこびとをえん。而して悲哀となげきとは逃げさるべし。」(イザヤ35・5・10)

本当の福音の世界になる。地上ではここまで全部いきませんけれども。どんな苦しみにも遭つても、艱難にあつても、このような天國的な現実を信交の現実としてつかまえてしまう。だから、どんなことが起きても決してへこたれない、歌を歌っている、神を讃美している。靈的なキリストを迎えれば、相対的な運不運だとか、幸不幸なんてものは乗り越えてしまう。そういうようなことがこの言葉の中に含まれるわけです。

いや大変な言葉ですよ、決して考えだした言葉ではない。全部示された言葉です。旧約もこういうところになるともう新約の福音と相照応するわけです。

よく年末になると、

「今年は誰々が亡くなりましたので喪中につき、新年のご挨拶は失礼します」

なんてな葉書がやってくるね。それは本当は情けない。

「天界のさらに素晴らしいところに往きましたから、おめでとうございますで結構です」

と、我々はそれくらいの気持でなければダメですよ。天界から、

「何を言っているか、私は天界で楽しいんだぞ！」

と。そういう烈々たる、

「光と愛の現実を生きていかなかったら、何が福音か」

と言いたくなってしまう。どうぞ、あなた方は普通の人の常識的なあんな表現は使わないでくださいよ。

●キリストは隠れたる神

イザヤ書というのはほとんどキリスト預言みたいなところだ。

「10 みよ主エホバ能力をもちて来りたまわん。その臂は統治めたまわん。賞賜はその手にあり。はたらきの値はその前にあり。11 主は牧者のごとくその群をやしない、その臂にて小羊をいただき、之をその懷中にいれてたずさえ、乳をふくます者をやわらかに導きたまわん。」(イザヤ40・10・11)

みなこれはキリストの別の表現みたいな預言です。読んでいると、

「ああこれもキリストの預言だなあ」

と、イザヤ書というのはそういう素晴らしいところです。

「わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人をみよ、我わが霊をかれにあたえたり。」

キリストは正に聖霊のひとだからね。



かれ異邦人に道をしめすべし。²かれは叫ぶことなく声をあぐることなくその声を街頭にきこえしめず。³また傷める蘆をおることなくほのくらき燈火をけすことなく、真理をもて道をしめさん。

素晴らしいね、ここらの言葉は。

⁴かれは衰えず喪膽せずして道を地にたておわらん。もろもろの島はその法言をまちのぞむべし。」(イザヤ42・1〜4)

キリストや、またその弟子のパウロの預言にもかかわっていると云ってもいいくらいです。

「⁹さきに預言せるところはや成れり。我また新しきことをつげん。事いまだ

兆さざるさきに我まずなんじらに聞かせんと。」(イザヤ42・9)

特に40章以下の第二イザヤは凄いとこです。ほとんどキリスト預言に係わっているような言葉が満ちています。

「¹⁵救をほどこし給うイスラエルの神よ、まことに汝はかくれています神なり。」

(イザヤ45・15)

キリストは正に「隠れています神」です。キリストは「隠れたる神」なんだけれども、皆イエスの本質が見えない。身内の人たちもさっぱり分からない。弟子たちもなかなか分からない。十字架に架かつて復活してやっと、

「あの人の言ったことは大変なことだったんだ」

ということが後から分かる。言った事した事、キリストは片っ端から人を救ってしまったからね、癒したり、死人を甦えらせたり。死人を甦えらせるような霊的な力だから大変なものだ。

しかも、キリストの生まれというものは特別な生まれです。乙女マリヤから生まれたという。そのことも預言の中にある。

「¹⁴この故に主みずから一の予兆をなんじらに賜うべし。視よおとめ孕みて子をうまん。その名をインマヌエルと称うべし。」(イザヤ7・14)

この場合の「おとめ」というのは「妙齡の女」ということで必ずしも処女に限らないと書いてありました。「インマヌエル」という言葉はマタイ伝にも出てくる。

「²³視よ、処女みごもりて子を生まん。その名はインマヌエルと称えられん。」(マ

タイ1・23)

とある。「インマヌエル」とは「神我らと共に」という意味です。

「インマー(共に)・マナー(我ら)・エール(神)」

「ゴッド・ウィズ・アス」

ということ。「共に」が、聖霊がくると今度は我らの「中」になる。

「聖霊のキリストわが中に」

ということになる。その現実を「信交」という。信じ交わる世界です。仰ぐの(信仰)では



ない。

「イエス」という名は「イエホーシユーア」（ヨシユー）という言葉からきている。

「神は救いなり」

という意味です。「キリスト」は

「油そそがれたる者」

という意味。

「……視^{はら}よおとめ孕^{はら}みて子をうまん。その名をインマヌエルと称うべし。」（イザヤ7・14）

これが正にキリストの預言なんだ。マリヤから聖霊の力で生まれた。

「自分はまだヨセフと肉体的に交わったことがないのに、なぜ子供が生まれるか？」

と、マリヤは不思議がった。けれども、

「聖霊がなんじに臨むから」

と天使ガブリエルが言った。そして、生まれた。聖徳太子の誕生にも何かそういった不思議なことがあった。日蓮のお母さんがやはり、

「太陽が自分の中に入ってどうのこうの」

と。特別な人物には時々不思議な示しがある。単なる科学的な頭では分からない。マリヤ自身がびつくりしてしまっただからね。けれども、

「そう仰るなら、そのようにどうぞなりますように」

と言った。そしたら、キリストが生まれてしまった。イエスというのは正に特別なかたですから、神の霊の力で現れてきた。だから、

「自分はアブラハムよりも先にありしなり」

とある。

「天界に在ったものがマリヤのおなかを借りて出てきただけのはなしだ」

と。

●十字架の碎け

今までみてきたミカ書やイザヤ書のところが、キリストの出現に係わる預言です。それから、一番著しいのは何といつてもイザヤ書53章です。これはあまりにも有名なところです。全くキリストを知っているかの如き言葉だ。

「われらが宣^{のいふ}るところを信ぜしものは誰ぞや、エホバの手はたれにあらわれしや。2 かれは主のま^めえに芽^めえのごとく、^{かわ}燥きたる土よりいづる樹株のごとくそだちたり。われらが見るべきうるわしき容^{すがた}なく、うつくしき貌^{かたち}はなく、われらがしたうべき艶^み色^{ばえ}なし。3 かれは侮^{あなど}られて人にすてられ、^{かなしみ}悲哀の人に^{やまい}して病患^{やまい}をしれり。また面^{かお}をおおいて避^{さく}ることをせらるる者のごとく侮^{あなど}られ



たり。われらも彼をとうとまざりき。

そういう、キリストの預言的存在がいたんだと、不思議なことが書いてある。その先がまた凄いんだ。

4 まことに彼はわれらの病患やまいをおい、我等のかなしみを担えり。然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。5 彼はわれらの愆とがのために傷けられ、われらの不義のために砕かれ、

十字架の砕けのことです。この砕けから私は「砕けの神学」なんてことを言いだした。

「痛みではない。砕けだ」

ということ。

みずから懲罰こらしめをうけてわれらに平安やすきをあとう。そのうたれし痕きずによりてわれらは癒されたり。6 われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまえり。

「我らの不義を神の羔羊こひつじ、キリストは全部しよってしまった」

という。この53章のキリスト預言は全く不思議な言葉です。後ずつとまるでキリストのことを言っているような言葉です。

7 彼はくるしめらるれどもみずから謙へりくだりて口をひらかず、屠場ほりりやにひかる羔羊こひつじの如く、毛をきる者のまえにもだす羊の如くしてその口をひらかざりき。8 かれは虐待しいたげと審判さばきによりて取り去られたり。その代よの人のうち誰か彼が活けるものの地より絶たれしことを思いたりしや。彼は民のとの為になれしなり。9 その墓はあしき者とともに設けられたれど、死ぬるときは富めるものともになれり。かれは暴あらびをおこなわず、その口にも虚偽いつわりなかりき。

10 されどエホバはかれを砕くことをよろこびて之をなやましたまえり。斯てかれの靈魂たましひとがの献物てなえものをなすにいたらば彼その末をみるを得その日は永からん。かつエホバの悦び給うことは彼の手によりて栄ゆべし。11 かれは己がたましひの煩勞いたずきをみて心たらわん。

こんな不思議なことがつらつら書いてある。

わが義ただしき僕はその知識によりておおくの人を義とし、又かれらの不義をおわん。」(イザヤ53・1〜11)

全くキリストの贖いのことが書いてある。イザヤ書53章全部、大変なところですよ。そういうのがいずれ現れるという。イエスはこういうところを自分の預言としてみなご存知です。もちろん旧約を読んで知っておられる。



●キリスト預言

イザヤ書55章でもそうです。

「^{あゝ}噫なんじら渴ける者ことごとく水にきたれ、金なき者もきたるべし。汝等きたりてかい求めてくらえ。きたれ金なく価なくして葡萄酒と乳とをかえ。

不思議なことが書いてあるね。

⁶なんじら遇うことをうる間にエホバを尋ねよ。近くいたもう間によびとめよ。⁷悪しきものはその途をすて、よこしまなる人はその思念^{おもひ}をすててエホバに反れ。^{かえ}さらば憐憫^{あわれみ}をほどこしたまわん。我等の神にかえれ豊かに赦しをあたえ給わん。」(イザヤ55・1:7)

ずっと55章全部、キリスト預言だ。全く本当に不思議なことが書いてある。この不思議な言葉を全部成就したのがイエス・キリストです。

イザヤ書59章の16節からあととずっとそれに近い。特に20節から、

「^{あがなうもの}20エホバのたまわく、贖者シオンにきたりやコブのなかの憊^{とが}をはなる者につかんと。エホバいい給わく、なんじの上にあるわが霊、なんじの口におきたるわがことばは、今よりのち永遠になんじの口よりなんじの裔^{すえ}の口より汝のすえの裔の口よりはなれざるべし。わがかれらにたつる契約はこれなりと。此はエホバのみことばなり。」(イザヤ59・20:21)

そういうキリストの不滅の言、聖霊の言が伝えられることを言っている。これはエペソ書6章に出ている。

60章の「なんじの上に光がきた」というのは、栄光そのものの、光そのものであるところのキリストの光、キリストがいかに光であるかということです。

「¹⁹昼は日ふたたびなんじの光とならず、月も輝きてなんじを照さず、エホバ永遠になんじの光となり、なんじの神はなんじの栄えとなり給わん。²⁰なんじの日はふたたび落^いず、なんじの月はかくることなかるべし。そはエホバ永遠になんじの光となり、汝のかなしみの日^{おわ}畢るべければなり。」(イザヤ60・19:20)

これは黙示録にこの言葉に相応するところがある。

「キリストが光である。日月が照らすを要しない。我々にとつては光はキリストだ」というわけです。ここでは旧約だから「エホバ」と書いてあるけれども、エホバの具体的な現れはイエス・キリストですから、そういうことになる。

こうやって探していくと、きりがなくいくらい在る。要するに、そういう意味で特にイザヤ書を中心にキリスト出現の預言が語られてある。キリストはイザヤ書を一番愛読されたようですね。

